

2018 CSR 報告書







平素は格別のお引き立てを賜わり厚く御礼申し上げます。
2018年版のCSR報告書をお届けいたします。

2007年のグリーンプリンティング認定取得を皮切りに、
様々なCSRの取り組みをして参りましたが、それらはす
べて「協進印刷は何のために存在しているのか」という社
会からの問いかけに対する答えであり、私たちがこれから
も皆様に必要とされるかどうかのテストであったように
思います。

収益事業であるかどうかにかかわらず、私たちの存在意
義、私たちが提供できる価値をもっと積極的にステークホ
ルダーの皆様にお知らせするために、本年「協進印刷価値
創造プロセス」としてまとめました。

私たちが向き合える社会課題はそんなに多くはありませ
んが、それらの課題に私たちのどんな取り組みをもって向
き合っていくのか、そしてそれがどのような価値を生み出
すと考えているのかを、決意表明のレベルも含めて表現し
ました。

いつもたくさんの皆様に支えられ、ご指導いただき、少し
ずつ自分たちの役割が明確になっていくことがたいへん
嬉しく、皆様のご厚情に心より感謝申し上げます。次第です。
是非本書をご一読いただき、忌憚のないご意見、ご質問、
叱咤激励など賜われれば幸いです。

2018年11月

株式会社協進印刷

代表取締役社長 江森克治

CONTENTS

- 3 特別対談 亀井善太郎×江森克治
「対話」が創る幸せな社会と協進印刷の使命

CSR 取り組み報告

- 12 協進印刷価値創造プロセス
14 コンプライアンス／環境
15 環境／情報セキュリティ
16 雇用・労働安全
17 社会貢献・地域志向／情報開示・コミュニケーション

協働事業報告

- 20 タツミのえほんプロジェクト
21 消防団元氣プロジェクト
22 今後の課題
23 各種認定

特別対談

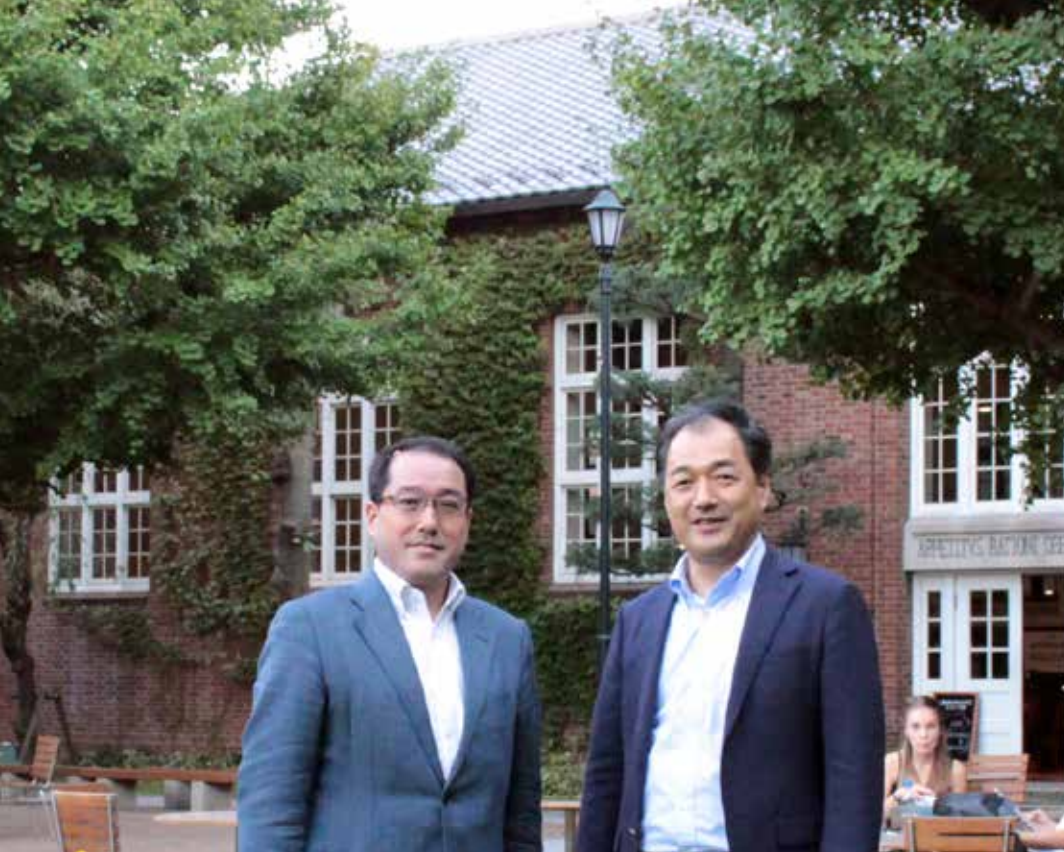
「対話」が創る幸せな社会と 協進印刷の使命

PHP総研 主席研究員

立教大学 大学院 特任教授

株式会社 協進印刷

亀井善太郎 × 江森克治



変わりゆく世界の中の日本

江森：亀井さんが書かれた PHP 総研の「企業は社会の公器」プロジェクト研究報告書が今年8月に発刊されました。「企業は社会の公器」とは、現パナソニックの創業者である松下幸之助氏の言葉ですが、「企業は個人のものではなく社会のものである」という、まさに現代の CSR につながる概念です。「企業は社会の公器」の詳細については、協進印刷の活動報告誌『JO』第25号に書きましたので、そちらをご覧ください。ここからは企業の社会的責任が見直される背景としての世界情勢や、対話の重要性、現

在全日本印刷工業組合連合会で亀井さんにもご協力いただきながら研究を進めている SR 調達に関する事など、幅広く議論していきたいと思っています。

まずは、世界情勢ですが、先般トランプ大統領が国連で多国間主義を否定するような演説をされましたよね。アメリカといえばまさに戦後のグローバリズムを牽引してきた存在であり、反グローバリズムの人たちはまさにアメリカを槍玉に挙げていたわけなのですが、その張本人が180度違うことを言ってしまうと、反グローバリズムの人たちも戸惑っているのではないかと（笑）と思うほどです。ここまで世界が変わってきているということについてのどの

ようご覧になっていますか。

亀井：今まさに変わっている最中なので、わからないことも多いのですが、経済の側面で言えば、トランプがなんと言おうがグローバル化は与件と考えるしかないと思いますね。それは今日食べた食事、いま私たちが来ている服、これらあらゆるものがグローバル化の果実なくしてはできあがっていないからです。ただし、それはそれとして、トランプがグローバル化の否定のようなことを言うのは、現在のアメリカの病んだ状況をみているとわからないわけではありません。アメリカは移民によって人口を増やし続け、人口が増えることの恩恵（人口ボーナス）で成長している国で、いってみれば先進国でありながら途上国のような政策をとっている国です。人口が増えていくことは良いこともありますが、前からいた国民が移民に仕事を奪われるというようなマイナスの面もあるわけで、トランプは国民の不満のはけ口として求心力を持っているし、これからもそうあり続けなければならないという、ちょっと不思議な存在の政治家ですよ。

江森：そうすると、グローバル化というのは経済活動の与件であって、多国間主義でいくのか、モンロー主義的な一国主義でいくのかというのは、その場その場の政治的判断ということになりますか。

亀井：それは振り子なんだと思いますね。私は人間というのは学びながら修正をかけていく動物だと思っていますので、行き過ぎたと思えば戻すし、開けすぎたと思えば締めるので、いまは振り子の途中にいるんだと思うしかないのではないのでしょうか。

江森：トランプが行き過ぎれば次の大統領が出てきて元に戻すということですね。日本では人口減少期に入って、アメリカとは違う課題が出てきています。



都合の悪いことは見て見ぬフリする日本人

亀井：日本は移民を受け入れなかったことで、グローバル化の負の影響をあまり受けずにすんだということは言えると思います。日本が移民を受け入れていれば、人口ボーナスが得られたかもしれません。しかし日本は経済価値を得ることよりも、社会的リスクや政治的リスクを排除する意思決定を、なんとなく消極的にしてきたということが言えます。しかしそう言うおきながら、コンビニに行けば外国人が働いていますし、つらい労働のところにもかなりの割合で外国人が入って活躍しているわけです。彼らは留学生だとか、研修生だという建前で働いていますが、実際には完全に労働力として期待されているわけですよ。そういう状況を見て見ぬ振りをする社会が、本当に正しい社会なのかというのは、もっと考えなければいけないと思いますね。ずるいですよ。外国人の労働力が必要ならきちんと受け入れればいいし、その議論をきちんとしていないということは、日本人が主体的

選択を避けてきているということで、政治上の最大の課題の一つだと思いますね。

江森：しかし、それをやらない政治家が当選するということは、そういう問題をうやむやにすることを国民が許しているということになりますよね。

亀井：そうです。だから社会が悪いということです。国民は毎日の生活の中で外国人が働いているところを見ているわけですからね。それを問題にしないというのは明らかに社会全体の責任です。

江森：そういうことでは日本が世界から尊敬される国になるなんて、程遠いですね。

亀井：2015年にイギリスが現代奴隷法という法律を作って、サプライチェーン上の強制労働の問題に取り組んでいますが、当然日本にだってあるわけですよ。でも大きな問題にはならない。

江森：イギリスという国は、そういうちょっと蓋をしたくなるような課題をきちんと表沙汰にして政策課題に乗せてきますよね。さすがだなあとします。

亀井：そうですね、今年のはじめには孤独担当大臣というのを作りましたしね。政策について考えるときは、こういうときイギリスはどうしているんだろうといつも参考にしています。

江森：白黒ははっきりさせないというのは、日本人の生活の知恵でもあると思いますが、それが単なるいいとこ取りになってしまっただけだと思いませんね。

議論の先にある「対話」の必要性

亀井：先日ある憲法学者とこんな話をしました。現在世界にはデータとプライバシーをめぐる3つの価値観がある。ヨーロッパを中心とする「尊厳」という価値観、アメリカを中心とする「自由」という価値観、そこに中国の「共産」という概念が出てきた。つ

まり土地と同じように個人情報も政府のものだけど、それで儲かったら経済的リターンは返すよという考え方です。そしてその憲法学者曰く、それぞれの国でどの立場をとるのかということ、それぞれの国の憲法にちゃんと書いてあるということです。では日本はどれ？と言われると説明できない。憲法にも書いていないから社会規範として現れてこない。こういうところは、いいとこ取りをしてきたツケが出てきているのかなと思いますね。どれかを取ったらどれかは捨てなきゃいけないトレードオフにさらされてないということなのかもしれませんが、そこはもっと社会として私たち自身が議論しなければいけないと思います。

江森：まあでもそれもむべなるかなというか、私たちが受けてきた教育のことを思えば、必然なんだろうとは思いますが。学級会でもみんながひと通り勝手に意見を言ったら、後は多数決でしたからね。議論をするという訓練を受けていない。

亀井：最近小学校の先生たちとの交流があって、学級会で多数決をやめようという提案をしています。他人の意見をよく聞いて、自分と違うとすればどこが違うのか、自分の意見とすり合わせるにはどうすればいいのか、それをまたみんなで議論してということをやって、最後に時間切れになれば多数決をするわけですけど、でもそれまでに、自分たちがいかに歩み寄れたか、違う意見を取り入れることができたかということ、先生たちが褒めたり促したりすればいいと思うのです。そういうところからやっつけていかないと、いいとこ取りで嫌なものは見ないというような体質は、変わっていかないといいんじゃないかなと思います。

社会的役割を示すための協進印刷価値創造プロセス

江森：弊社ではまさにそれを「対話」と定義していて、「対話」ができる「成熟した市民」による社会を目指し、その過程における

人々のコミュニケーションを支援するソリューション・プロバイダーを目指しています。「対話」というのは、Aという意見を持っている人と、Bという意見を持っている人が「対話」することで、Cという意見を導くというイメージです。これまで、弊社の活動がビジョンからどのように導き出されているのかが、やや感覚的でわかりにくいところがあったので、ミッション、ビジョンからどうやって社会に貢献しながら、経済的価値を生み出していくのかというプロセスを、今年のCSR報告会にあわせて「協進印刷価値創造プロセス」としてまとめました。(協進印刷価値創造プロセスはP12参照)

亀井：お一、すごいすごい。

江森：第三者評価を兼ねてコメントをいただけませんか(笑)

亀井：ここに「社会課題の解決」とありますが、私は最近「解決」という言葉は使わないようにしています。社会課題は常に変容していきます。ひとつの課題を解決したように思っても、次にはより高いレベルの課題が現れます。ですから協進印刷があつた場所に根を張って事業を続けていく中で、粘り強く社会課題と向き合っ

ていくという要素は入れるべきだと思います。

次に「市民活動の支援」とありますが、この「支援」とはなんなのかということ、言葉としてもっと考えても良いかもしれませんね。もしかすると地域市民としての企業ということなのかもしれません。

江森：支援する側される側という構図ではなく、地域社会と一体となって地域の課題に取り組む企業というニュアンスをどう出すかということですね。

亀井：そういうことですね。高度経済成長期の失敗のひとつは、提供する側と受け取る側を対立させて置いてしまったことです。でも本当は相互型のはずなんです。どちらかが一方的に受け取っているわけではなくて、どちらも出し合って何かを創っているはずなんです。書き言葉にするとどうも生きてこないのですが、相互的なところをうまく表現できると良いのではないかと思いますね。

江森：それは行政職員の物言いを聞いているとよくわかりますね。未だにその社会構造は健在だと思いますし、私たちがそこにどのように関与できるのかということがわかるように書き直してみます。他にはどうでしょうか。

亀井：そうですね、協進印刷は何のプロなのかということをもっと鮮明に出して良いと思いますね。ニセコ町のまちづくり基本条例に「町職員は、まちづくりの専門スタッフとして、…」とあって、行政職員がまちづくりのプロであることを宣言しているわけですが、そういうことが盛り込まれていると良いと思います。社会に対して何を付加価値として与えているのかということは、もっと書いても良いと思いますね。

江森：それは、対話のツールを作ることであり、対話の場を作ることであり、非言語の領域にあるものの言語化のプロということですかね。





書き言葉の世界と言葉のない世界をつなぐということ

亀井：日本語というのは世界でも最もハイコンテキスト*な言語と言われていまして、日本語をそのまま英語に翻訳しようとしても、あまりに多義的でなかなかうまく訳せないということが多々あります。

私が講演などで話すことに「書き言葉の世界」「話し言葉の世界」「言葉のない世界」というのがあります。このうちで人間の幸せがどこにあるかといえば、「言葉のない世界」の方に多くあるわけです。同じように地域社会の困りごとにも「言葉のない世界」に現れます。幸せとか、困っていることは言葉ではうまく説明できないことなのです。しかしながら行政制度で対応するとか、企業が組織として対応するとなるとドキュメンテーションにならないといけない、つまり「書き言葉の世界」でないといけないのです。この「書き言葉の世界」と私たちの日常の暮らしである「言葉のない世界」の間をうまく行き来しないといけないのですが、それを

両方できる人って結構少ないのです。

江森：これは男性社会、女性社会の構図にも似ていますね。男はとにかく書面にしないと気が済まない。でも女性は共感だけでどんどん話を進めていけちゃう。

亀井：市民と行政の対話の場で良く起こることなのですが、住民のおじさんがすごく怒っているわけです。でもそのおじさんは自分が何で怒っているのかを言葉でうまく説明できない。「おかしいだろ！」みたいなことしか言わない。そうすると行政職員はこのおじさんを単なるクレーマーと見做すわけです。でも本当はおじさんはクレーマーなんかじゃなくて、本当に何かに怒っているのです。その原因が何なのか、何が解消されればおじさんは納得してくれるのかということを、行政職員はもっと真剣に考えなければいけないし、うまく言葉にできないおじさんの気持ちを言語化することこそが、行政職員の仕事なのです。でも、それができる人は本当に少ない。同じ日本人が同じ日本語で話しているのに全然通じてないんですよ。なのに行政の方はそういう場を設けたということでガス抜きは終わったと思ってる。市民はガス抜きどころかますます怒ってる。そういうすれ違いが現場では良く起こっています。私はその橋渡しを政治の領域でやってきた人間なのでよくわかりますが、「言葉のない世界」と「書き言葉の世界」の間には通訳が必要です。この価値創造プロセスを見て、協進印刷さんの仕事はこれかなと思いました。

江森：まったくその通りです。私たちがやろうとしていることは、まさに「言葉のない世界」での人々のさまざまな思いを「書き言葉の世界」に出すことです。行政職員ができないから私たちがやるということもありますが、これからの時代に言語化のニーズはもっともっと高まると感じています。

亀井：その通りなのですが、この役割を伝えていくのはなかなか難しいですね。協進印刷の役割そのものを言語化する必要がある

でしょうね。

江森：非言語領域の言語化という分野では女性がとても活躍します。女性は「言葉のない世界」の問題をいとも簡単に「話し言葉の世界」に持って来ることができます。だから女性が入ることで課題を可視化しやすい。弊社に女性社員が多いのは、ある意味必然的なことなのかもしれません。

もう少しの想像力が対話をドライブする

亀井：昨年をはじめてホームレスを経験した方とじっくり話す機会があって、ある方になぜホームレスになったのか訊いたのです。その方はある会社の営業マンだったのですが、あるとき会社でうまくいかないことがあって会社に行けなくなってしまった。もちろん家族もいたのですが、会社で起こったことを家族に言うこともできなかった。そうやって自分の居場所が無くなってしまって、たぶん自分が消えればみんなうまくいくと思ってしまったんでしょうね。彼は不真面目でホームレスになったわけではないのです。むしろ真面目すぎたのかもしれません。そういう話を聞いているうちに、もしかしたら自分もなったかもって思ったんですよ。僕はそんなに真面目じゃなかったからなんとか生き延びてこられたけど、自分もなったかもって思ったことで、ホームレスの問題がすごく自分の近くに来るわけですよ。そのあとちょっとの想像力があれば、先ほど江森さんが言ったAとBからCが生まれるようになるんだと思うんですよ。自分はAだと思ってたけど、Bもあるのかということに気付いて、AもBもお互いのことをわかってなかったなと反省した先にCが出てくるということですよ。ここをどう促していくのかということは、これからの社会にとってはとても大事なことだと思います。

江森：言葉の意味を共有するために『協進印刷のことば』という

小冊子を作っているのですが、そこに「課題に共感できる感性を持っていなければならない」という件があるのですが、目の前の人の困りごとについて、わかったような気になって自分の知識や常識の中で処理してしまうのではなく、心で感じて想像することが大事なんでしょうね。

亀井：以前、江森さんに講義していただいたのはCSRの授業でしたが、それとは別に対話の授業というのもやっているんです。半年間対話を続けて、対話の身体的感覚を実感するというものです。これはなかなかおもしろいのですが、初等教育からの悪しき習慣で、先生は正解を隠し持っていて、それと自分の答えを合わせにくるわけですが、僕はすべて「正しい」で返します。そうするとみんな正しいわけですから、正しいと正しいがぶつかることになります。その先に次の「正しい」が出せるかという、そういうおもしろさを体験してほしいと思ってやっています。

江森：亀井さんの話を聞いていて気付いたのですが、私たちが提供しようとしているサービスって、対話をしようとしている人だけに必要なサービスなんですよ。だからお客様になかなか会えない、つまり仕事が少ない(笑)。

亀井：でも、これ社会的にはとても必要なことですよ。もし江森さんが対象者が少ないと感じているのだとしたら、それは多くの人が我慢しているからだと思います。

江森：我慢しているのか、諦めているのか…。もちろん必要なことだと信じているからやっているのですが、私たちのサービスを伝えるのはとても難しいと感じます。

亀井：「企業は社会の公器」の報告書でも書いたように、事例を出していくと良いのではないですか。でも、この価値創造プロセスは僕はよくわかります。第三者評価的にいうと、細かいところはともかくとても良いと思います。

江森：それがあって説明はしやすくなりましたね。インター

ンに来た学生などはそれで説明するとよく理解してくれます。

亀井：そうですね。いまの30代前半以下の人たちはピンとくるはずですよ。若い人の方が正しいですよ。だって彼らの方が残りの人生長いんだから真剣に考えてますから。その若い人たちをアタマの硬いおじさんたちが邪魔しないように、対話の重要性に気づいたおじさんである私たちが、こういう活動を続けていくしかないですよ。

江森：そうですね。若い人たちは対話が必要だということは感じていてと思いますね。ただステレオタイプな大人が否定してくるので迷ってしまっている。インターンに来た子たちには、本当にヘンな会社にだけ入っては欲しくなくて、それだけが願いです(笑)

亀井：僕も大学3年生の娘に「業種なんてどうでもいいから、いい人がいる会社に入りなさい」と言っています。それは自分がこの人と仕事がしたいなあと思う会社であって、それが判断できるぐらいの感性は身につけているはずだから、自分の感性を信じなさいと言っています。実はこの報告書を書いた後に、いい仕事ってなんだろうと考えていたら、ああそうか、いい仕事っていい人とした仕事だって気づいたんですよ。仕事は規模じゃないです、誰とやったかですよ。そういういい仕事はいくつできたかで、自分の幸福感とか、勲章のようなものがついてくるのではないかと思いますね。だから会社はいい人を作ればいいんだと思いますね。

SR 調達 は行政改革のための蟻の一穴

江森：実はもうひとつ話したいことがあって、SR 調達のことです。SR 調達というのは「社会的責任調達」のことで、ここでは行政機関の調達における責任のことです。現在は地方自治体であれば地方自治法という法律の中で、原則として価格の安いところから

買うことが定められているわけですが、金額だけが評価基準になると、環境負荷の高いものを買ってしまったり、児童労働などの人権侵害が起こっている商品を買ってしまったりすることになりかねないわけで、地方自治体が調達という行為を通して、持続可能な社会に貢献するという考え方が必要になってきます。全印工連では昨年よりSR 調達研究部会を設置して私が部会長を、亀井さんには議論をリードする役をお願いしています。

SR 調達を実現できるかどうかは、これまでの話の流れでいえば、「書き言葉」の世界の住人に、感性にあふれた言葉のない世界のことを、どう理解させるかということになるかと思いますが、先ほどの亀井さんの話はまったくその通りだと思いながら、実際にはなかなか難しいことです。

亀井：行政マンが大きく勘違いしているのは、「私」を殺すことが公平に社会に接することだと思っているというところですよ。行政職員の研修などにいくと必ず「私や私に似た誰かが感じている生きづらさを、少しでも小さくするのが政治や政策の仕事です」と



いうことを言います。行政職員だって、早起きしてお弁当を作って、子どもを保育園に送って、駅まで走ってというような生きづらさを日々感じているわけです。それなのに仕事になると、その「私」を忘れてしまう。

江森：急に書き言葉の世界の住民になってしまっって、形式ばったことを言い出すわけですね。

亀井：行政職員のあなただってネット通販で買うときもあるかもしれないけど、お気に入りのあの店で買いたいものだってあるでしょう。なんでそれが行政でできないんですか。と聞くと、いや、公平性がなにかかんとかと言うんですけど、でもそれが安かろう悪かろうを招いているのではないんですか。という、う～んで黙っちゃう。それを行政にわかってもらうようにしていかないといけないと思いますね。

従来政策の手段は予算・法規制・税制の3つと言われていたのですが、今やヨーロッパなどでは4番目として「調達」が入ってきていて、同じお金を使うんだったら生きる使い方をしましょうというのは常識になりつつあるんですね。

江森：行政の「買い物」が商品市場に与える影響力の大きさを考えれば当然のことだと思いますね。特に地方における印刷のように許認可事業ではないけれども、行政が市場の大きなシェアを占めるような分野では、とても影響が大きいと思います。ここでも日本はだいぶ遅れをとっているということですね。今の若い人たちが生きて行く時代のことを考えると、これからの国際社会における日本の位置というのがとても気になります。

「説明すること」で日本の付加価値は高まる

亀井：そうですね。でも要は自分の考えをちゃんと言える人になれば、国際的な比較はそれほど気にする必要はないと思いますよ。



江森：最近全印工連で海外の印刷市場について話を聞く機会が多いのですが、そこでつくづく感じるのは、先ほどハイコンテクストの話も出ましたが、日本語って特別だなど。だから日本語をきちんと使うというだけでも、かなりの参入障壁になるし、この先もこの国を守っていく重要な武器なんだと思いますね。だから英語を公用語にするなんてことしないで、日本語を大切にしていきたいと思いますね。

亀井：そうですね、もちろん日本にも土地土地の言葉はありますが、比較的母語と国語が一体化しているので、多様性がありながら誰もが同じ言語で意思疎通ができるというのは強みなんですよ。ただそこに埋没するのではなくて、他の言語がローコンテクストであるということ認識した上で、日本の付加価値を世界の中でどう創っていくかだと思いますね。日本の観光が良い例だと思いますが、かつて旅行代理店が企画したパック旅行というのは、旅館に連れて行って、ご飯を食べさせて、送迎して終わりというのが主流でしたよね。これはその地域の良さを全然説明して

いないわけです。有名な旅館とか、有名な観光地というのは説明しなくても誰でもわかる価値ではあるのですが、どこでもできることです。そうではなくて、プラタモリといういい番組がありますが、ああやってその地域をよく知っている人と一緒に歩いてみると、今まで見ていたのとまったく違う風景に出会うことができるわけですね。あの番組でタモリさんと学芸員さんたちがやりとりしていることって、要するにローコンテキスト化なんです。そうやってそこにあるストーリーをきちんと説明してあげることによって、外国人はそこにお金を払うようになるんですね。それが今の世界の稼ぎ方の仕組みであって、モノだけ作って、これの良さがわからないやつが悪いとか言っているようではダメなんです。若い人たちにはそこをきちんと理解してもらいたいと思います。

江森：SR 調達をひとつの突破口として物質としての「モノ」の価値だけでなく、ソフトサービスの価値や、環境や働き方改革の価値など、多様な社会的価値が認められる社会になると良いと思います。

日本の中での横浜。横浜の企業「協進印刷」の役割

亀井：もちろん SR 調達は大事ですが、行政の相対的な社会に対する影響力は小さくなってきていますので、市民社会そのものが、これちょっとおかしいよねと思うことに対して、声を上げていくことが大事なんでしょうね。そういう意味では横浜は先進地だと思います。横浜がいいのは「三日住めば浜っ子」といわれるように、基本的に差別感情が少ないし、肌の色が違うことについてもそれほど抵抗感のない人が多いなと感じます。協進印刷は横浜の会社だなと感じますよ。

江森：それはうれしいですね。最高の褒め言葉に聞こえます（笑）

亀井：開かれていて、分け隔てがなく、誰にもフェアで、という価値観に基づいたコミュニケーションを大切にしていきたいという思いをととも強く感じます。それは江森さんの人柄もあるのでしょうけど、江森さん自身が元々はガチガチのサラリーマンから変わっていったところとか、社員の皆さんの思いとか、横浜という土地の風土が協進印刷を育てているという印象を受けます。ここからもう一段もう二段上がっていくと、もっといい影響が伝わっていくのではないかと思います。

江森：責任重大ですね。フェアな対話による社会創造というのは、現代社会において深層的なニーズなのではないかと思います。そのような深いニーズに応えることを使命として、これからもできることから着実に実践していきたいと思います。

*ハイコンテキスト

コミュニケーションを行なう際に、言葉以外のものに重きを置くか、言葉そのものに重きを置くかという姿勢の違い。ハイコンテキストとは、言葉そのものよりも、文脈や背景、言外の意味を重視する姿勢を指す。一方、言葉そのものの意味を重視する姿勢をローコンテキストという。

アメリカの文化人類学者であるエドワード・T. ホールが唱えたコミュニケーション環境の識別法。

コンテキストは文脈、脈絡、前後関係、背景などと訳されることが多い。

Profile

亀井善太郎さん

PHP 総研主席研究員／立教大学大学院特任教授

慶応義塾大学経済学部卒業。日本興業銀行、ボストン・コンサルティング・グループ、衆議院議員等を経て現職。認定 NPO 法人アジア教育友好協会理事、みずほ総合研究所アドバイザーも務める。シンクタンカー、大学教員、NPO マネジメントとして民間からの政策の発案、社会変革の担い手人材の育成、そして、自らその実践にも取り組む。

衆議院決算行政監視委員会参考人、内閣官房行政改革推進会議年次公開検証評価者、自治体における行政改革等に関する各種審議会委員長や委員等を務める。

CSR 取り組み報告

取り組み報告に先立って、本年策定した「協進印刷価値創造プロセス」について紹介いたします。

これは、私たちが社会のどんな課題に向き合い、どんな事業を通じて社会に価値として認められていくのかというロジックを示したものです。

ともすると本業度外視になりがちな社会貢献や環境の取り組みに対して、社会に対しても自社に対してもしっかりと意味づけし、常にステークホルダーのニーズに耳を傾けることを意識するために、今やっていることと、将来目指していることと、その背景にある社会の動きを可視化しました。

中小企業にとって社会課題はとてつもなく大きく、まるで蟻が象を見上げているようなものです。蟻一匹の力で象を動かすことなどできるはずもないので、中小企業はともすれば社会課題から目を逸らしてしまいがちですが、時代の変化を捉えた経営をしていくためには、社会に目を向けないわけにはいきませんし、それは社員ひとり一人の日々の行動にもつながっていかねばならないことです。

そこで、自社の小さな事業が、どのような社会課題に対応したものなのかを結びつけるために、私たちの活動分野である情報コミュニケーションの観点において、社会と協進印刷がともに目指す理想の姿〈共通価値〉を、社会と私たちを結びつける架け橋として設定しました。

14 ページ から 2018 年度の主な取り組みについて報告します。取り組みは全印工連 CSR 認定制度で規定されている 8 つの CSR 項目に従って分類されており、上部欄外にカテゴリーを表示しています。

協進印刷の価値創造プロセス 2018

長期ビジョン

ソーシャル・ソリューション・プロバイダーとして社会課題に向き合い、対話を通じて感性価値を最大化する

未来を担う子どもたちに、安全で安心な自分づくり教育の機会を提供する

CSR マネジメントにより、社会のニーズを捉えた変化に強い組織づくりをサポートする

社会的な居場所を提供し、仕事を通じて社員が幸せになる会社をつくる

地域での対話の機会を創出し、地域で支え合う環境をつくる

提供価値
(協進印刷の事業領域とスペシャリティ)

- ・言葉にするのが難しい価値の言語化、ビジュアル化
- ・それぞれの「背景」を言語化、ビジュアル化することによる共通理解の促進
- ・共感を高める「対話」の場づくり
- ・背景の異なる様々な関係主体の間に立って意思疎通を図る「日本語間通訳」
- ・環境負荷を低減する印刷物の企画・製造
- ・紙媒体の有効性を最大限に活かす印刷物の企画・製造
- ・効果的なメディアミックス提案
- ・ソーシャルマーケティングの企画・制作・実施

- ・あらゆる年齢層でのキャリア教育の実施
- ・子どもの育ちをサポートする事業への支援
- ・本業を通じた子どもの育ちを応援する事業の推進

- ・CSRマネジメントシステムの導入および運用のコンサルティング、技術的サポート
- ・CSR監査等ステークホルダーニーズへの対応のコンサルティングおよび技術的サポート
- ・CSR報告書や社内報の作成、CSR報告会の企画・運営など、ステークホルダーとの対話を促しステークホルダーニーズを析出するための、CSRコミュニケーションのサポート

- ・ライフステージに応じた柔軟な働き方の実現
- ・自己の能力を社会に活かし、将来に希望が持てるキャリア形成
- ・多様性に富んだインクルーシブな職場づくり

- ・より良い地域づくりのための地域主体との協働

果たすべき役割
(ミッション)

紙媒体による環境負荷を極小化しつつ、情報伝達媒体としての有効性を正しく評価・活用し、効果的なメディアミックス手法を確立する

主体的な意思決定の拠り所となる価値ある情報を言語化し、系統立て、言語情報のみならず絵や図表なども加えて加工し、多くの人に理解しやすいようにする

キャリア教育など企業だからこそできる手法で、青少年教育に参画する

倫理的行動規範の確立やガバナンスの強化に有効なCSRマネジメントシステムを活用し、社会のニーズに応じて提供価値をアジャストできる、変化に強い組織体を増やす

人々がそれぞれの立場を尊重しあい、支え合いながら生きがいを見出せる社会にしていけるために、地域においても、会社においても、「対話」を促進する役割を担う

共通価値

社会を取り巻く様々な課題に対し、根気強く「対話」を続ける「成熟した市民」が創る持続可能な社会

対応する社会課題と社会のニーズ (枠内)

環境問題や業務効率化の観点からのペーパーレス化

- ・各媒体の情報伝達の有効性と環境負荷の裏付け
- ・代替メディアの模索

主体的な意思決定の困難性 (バイアスがかかりやすい社会)

- ・自らの価値を効果的かつ効率よく伝えるための手法の開発
- ・感性価値 (言葉にしにくい価値) の言語化
- ・当事者として考え主体的に行動できる生きる力をもった人材育成
- ・幼少期から社会と関わる教育の実践

組織のガバナンスリスクの増大と、時代の変化によるニーズと提供価値のずれ違い

- ・不祥事を未然に防ぐ、コンプライアンス、ガバナンスの強化
- ・倫理的行動の動機付け
- ・社会のニーズを適時に把握できる情報収集の仕組み作り
- ・ニーズの変化に柔軟に対応出来る組織作り

孤立化、孤独化の進展と、働くことへの不安の増大

- ・インクルーシブな職場とモチベータティブな評価制度
- ・地域のつながりの強化と、サードプレイスの充実

法令遵守のために、最大限の努力を

今年度全社員が適用法令の名称の把握だけでなく、各法令の要求事項に対して理解を深めることを目的に、適用法令の読み込み作業を始めました。すべての適用法令を3年をかけて読破することを目標にしています。

中小企業では、法務の専門部署が無い場合が多く、正確に要求事項を把握するのは難しいことですが、言われたからやるのではなく、法の精神を理解して積極的に社会に貢献できるよう、全員で努力しています。

環境マネジメント報告

業界独自の「オフセット印刷サービスグリーン基準」に基づき、2007年から環境マネジメントシステムを運用し、廃棄物の削減や環境保全活動を行っています。

昨年度の廃棄物等排出量の実績は下記の通りです。概ね一昨年と同様ですが、廃プラスチックについては、従業員用「休憩室」の設置に伴い設置場所の整理を実施したことにより、多くのプラスチックが排出され増加となりました。

また金属くずは、以前よりリサイクルの可能性を検討していましたが、少量でも引き取っていただけることとなり、全量リサイクルが実現しました。

2017年度CO₂および産業廃棄物排出量・リサイクル量

(2017.4.1～2018.3.31)

排出

項目	排出量	前年比
CO ₂	21.4t	95.9%
廃油	0.39t	99.0%
廃アルカリ	0.04t	50.0%
廃プラ	0.11t	175.0%
金属くず	0t	—
一般廃棄物	720ℓ	94.1%

リサイクル

項目	排出量	前年比
紙	11.0t	115.8%
アルミ	0.6t	100.0%
金属	0.6t	—

Maximum effort to comply with laws and regulations

This year, we began learning Applicable law not only to understanding of names of the Applicable law but also for our deeper understanding requirements of each law. We aim to have all applicable laws to be done in three years.

It is often the case for small and medium-sized companies not having a special department of legal affairs, thus to understand requirements precisely is difficult. However, we all try to understand the spirit of law and actively contribute to the society, rather than doing being forced to do so.

Environmental Management Report

We, Kyoshin Print, making use of the Environmental Management System from 2007, contribute to reduction of waste and conservation of the environment, based on "Off-set Print Service Green Standard," which is unique to our industry.

The amount of waste emission last year is below. It is almost same as that of two years ago, but about waste plastic, installation of "resting room" for employees and organizing the location of them resulted in the increased amount of plastic discharged.

Also, we had been considering recycling of metal scrap. It has been decided some amount of metal scrap to be taken over, and we achieved recycling of all.



GREEN PRINTING JFPI
F-B10042

可能な限り社内で「リユース」を

本業を通じた環境貢献事業として印刷ロスである「損紙」のリユース活用を進めています。通常損紙はリサイクル業者に引き取られ、製紙会社で再生紙にリサイクルされますが、輸送や再生品製造のことを考えると、排出される現場でリユースする方が、全体のエネルギー消費は少なく済みます。これまで開発してきた損紙を活用したリユース封筒やリユースメモ帳に加えて、今年度から梱包材としてリユース梱包紙を開発、自社製品の梱包での利用をはじめています。



印刷版のパッケージに1枚ごとに入っている保護用紙(左)を、包装紙として再利用。あえてリユースマークを印刷し、商品を受け取ったお客様の環境意識の啓発も図っている。

情報セキュリティマネジメント報告

神奈川県印刷工業組合が独自で運営する情報セキュリティ認定制度「PISM」認定を取得し、社内の情報セキュリティや個人情報保護に努めています。今年度はカードキーの紛失や、中間製品の渡し間違えなどが発生してしまい、不適合事案として対策を実施しました。また不適合に至らない小さなリスクを拾うため、ヒヤリハット事案の記録も始めています。

情報セキュリティ不適合事案

(2018.3.1～2018.9.30)

	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
不適合	3	0	1	0	0	0	0
ヒヤリハット	0	0	0	0	0	0	1

As far as possible "Reuse"

As contribution to the environment through our main business, we are encouraging reuse of waste paper. Normally waste paper is taken over by recycling enterprises and turned into recycled paper at paper producing company. However, considering transportation and cost of recycling, it is better to reuse at the place where papers are wasted because the less amount of energy is consumed.

Beside reuse envelope and reuse notepad that we have been developing, we have developed Reused Packing Paper for packing material and we have begun to use it for packing of our products since this year.

Information security management report

Our company acquired "PISM" certification, which is the information security certification system operated independently by Kanagawa Printing Industry Association. Since we lost card key and happened a mistake in passing intermediate products, we took measures as nonconformity cases. Beside we have been recording some near-miss examples for the purpose of picking up small risks.



雇用・労働安全

セルフ・キャリアドック制度を導入

社員が自らのキャリアを考える機会を提供し、能力開発を支援するために、厚生労働省が推進するセルフ・キャリアドック制度を導入しました。

またワークライフバランス向上のため、昨年に引き続き、時間外労働時間削減および有給休暇取得率向上に取り組んでいます。時間外労働は正社員、フレキシブル社員ともに昨年より減少しましたが目標には及びませんでした。有給休暇取得率は、正社員・フレキシブル社員とも目標達成となり、年間換算すると国が設定している70%の目標もクリアできそうです。

時間外勤務と有給休暇取得の実績（3月～9月）

	正社員			フレキシブル社員		
	目標	実績	昨年比	目標	実績	昨年比
時間外勤務(月平均)	10h	13.6h	89.4%	0h	1.12h	36.1%
有給休暇取得(7ヶ月間)	35.0%	40.0%	150.3%	35.0%	42.28%	82.1%

ひとり一人の幸せな人生のために

2012年から、キャリアアップのため全員で年間300時間の教育を受けることを目標としています。セミナーで得た知識の着実な定着を目指して、インプットした知識をすぐにアウトプットする機会を設け、毎月開催される社内勉強会で外部セミナーを受講した社員が講師を務めるようにしています。

また若手社員向けには、主婦の社員が講師になりアイロンがけ、浴衣の着付け、魚のさばき方など生活に役立つ講座を企画しています。



知識のある社員が講師となり、勉強会を開催



女子カレッジでの「浴衣の着付け講座」

Introduced a self-career dock system

We introduced Self-Career Dog System, Ministry of Health, Labor and Welfare is promoting, because it helps employees to have the opportunity of thinking themselves' careers and to develop their ability.

To improve work-life balance we work on reducing overtime work and increasing paid vacation acquisition rate. Though overtime work decreased compared with last year regular employee as well as flexible employee, we didn't achieve our goal. On the other hand, we reached our target of paid vacation acquisition rate both regular employee and flexible employee, furthermore in terms of annual conversion it is likely to achieve the goal, 70% that the government has set up.

For each employee's happy life

We have aimed for receiving education 300 hours per year by all for career enhancement since 2012. For the purpose of steady establishment of knowledge that gained at the seminar, an employee who has taken an external seminar tries to give a lecture at monthly internal study meeting as a chance that immediately output the input knowledge.

Also, for young member, employee who is a housewife plans some internal seminar that help them with their life for example ironing, dressing of Yukata, how to handle fish and so on.

未来を担う学生たちに社会を体感する場を

昨年11月以来、台湾研修生1名、市内高校生2名、市内大学生4名、県外大学生1名のインターンシップと中学校3校の職業体験受入れをしました。インターン生からは「社会に出ることが不安」「CSRと企業活動が結びつかない」など様々な不安や疑問の声が聞かれるものの、最終日にはそれぞれに何かを得て充実している様子を見ると、改めてキャリア教育の意義を感じます。これからの社会を創っていく若者たちを今後も応援していきます。

また今年8月には、横浜市内市立学校の教科担当者が一堂に会する教育課程協議会総合的な学習の時間部会で、弊社の理念や取り組み等を紹介いたしました。ワークショップでは、自校ではどんなことができるかを一生懸命考える先生たちが熱く語り合っていたのが印象的で、協働の機会が楽しみです。



県立高校2年生は様々な仕事への可能性を体感



大学2年生ながら積極的な参加。緊張の名刺交換



全印工連産業戦略デザイン室を見学
業界最先端の議論に熱心に聞き入る研修生(写真奥)



総合的な学習の時間部会でのプレゼンテーション
教員の皆さんに地域企業としての思いを語る

To provide a place to experience society for students who will be responsible for the future

Starting from getting a trainee from Taiwan in January this year, we accepted 2 high school students from Yokohama, 4 university students from Yokohama, and an university student from outside the prefecture as internship students and work experience program of 3 junior high schools. Internship students said various anxiety and doubt, for example "I'm worried about going out into the world" "It is not connected CSR and business activities" et cetera. However, they each obtain something and they seem to be fulfilling for the last day of the program, it make us feel anew the significance of career education. We will support youth create a future society from now on.

In addition, we introduced our idea and efforts at Curriculum Council Comprehensive Learning Hours Subcommittee that curriculum staff in Yokohama municipal school come together in this August. In the workshop, it was impressive that teachers were talking each other what can they do at their school, so we are looking forward to work together.

母校にCAPを贈ろう

昨年から始めた大口台小学校への「子どもへの暴力防止プログラムCAP (Child Assault Prevention)」のプレゼント。今年も3年生向けに実施することができました。2社のメディア取材も入り、注目度が高まっているのはうれしい限り。授業が終わっておなじみのCAPウォーターを配布していると、「あのね…」と子どもたちはいろいろな話をしてくれます。親と先生以外に相談できる大人がいるのはとても大事なことと感じる瞬間です。秋には保護者向けワークショップも開催予定。PTA会長のご尽力で近隣小中学校との合同開催となりそうです。

小学3年生と大口通商店街を盛り上げ

学校と企業等が連携し、子どもたちが起業体験や地域課題の解決に取り組む横浜市教育委員会主催の「はまっ子未来カンパニープロジェクト」。2年目の2017年度は大口台小学校の3年生と大口通商店街の活性化のためにパンフレットを作成。江森社長から教わったペルソナマーケティングの手法をもとに、子どもたち自ら取材し、写真を撮り、キャッチコピーを考えてお店の魅力を伝えました。子どもたちが地域を知り、課題に気づき、たくさん学びを得るお手伝いできました。

Let's give a CAP to an alma mater

The gift of "CAP(Child Assault Prevention)" for Ooguchidai elementary school began last year. This year also carried out it for 3rd grade. We are glad to increase attention because 2 news media interviewed us. After the class, during distributing familiar CAP water, children talk various topics to us like "Hey...." It makes us feel that it is absolutely important there is an adult that children consult except parents and teachers. We are going to hold a workshop for guardian. Thanks to the president of PTA, it is likely to be a jointly hold with neighboring elementary and junior high school.

Activation project of major shopping street with elementary school third grader

"Hamakko Future Company Project," held by Yokohama City Board of Education, is a project that children experience entrepreneurship and work resolving regional issues, cooperate with school and company. We created a pamphlet of Ooguchi Shopping Street with 3rd grade students at Ooguchidai elementary school in second year, 2017. Students themselves interviewed, took pictures, thought catch copies, and devised how to tell attraction of shops, based on persona marketing method that learned from president Emori. We helped children with understanding their home town, find issues, and gain lots of learning.



CAPプログラムを終えて3年1組の子どもたちと「安心・自信・自由!!」



担当の商店のPRについて議論する子どもたち



大口の企業・商店・福祉施設・金融機関などが参加する「災害時助け合いネットワーク」は町内会館で開催

地域の一員として、地域と共に

地域で活動する企業市民として、より良い地域社会を育むことも私たちの大切な使命と考えています。

大口地域に働きに来ている方々と住民との助け合いを目的に立ち上げた「災害時助け合いネットワーク」の運営、「オレンジプロジェクト お年寄りにやさしいまち・六角橋～地域で取り組む認知症対策～」への協力、区社協を通じての高齢者世帯への「住宅防火アドバイスボード」配布、横浜市資源リサイクル事業協同組合主催「環境絵日記」地域企業賞への協賛、WFP ウォーク・ザ・ワールドへの協賛など、地域の方と一緒に取り組んでいます。

社会と私たちをつなぐいくつものかけ橋

恒例行事として定着しつつあるCSR 報告会「ありがトウナイト」は5回目を迎えることができました。同窓会のように写真撮影が行われたり、意外な再会があったりとご来場者同士が笑顔で交流する姿は、私たちの喜びにもつながっています。

弊社活動報告誌「JO（ジェイ・オー）」もたくさんのみなさまのご協力をいただき6年目を迎え、今年10月には25号を発行しました。ご感想やご指摘をいただくことも増え、さらに良い情報発信ができる紙面になるよう努力してまいります。昨年からはじめています。ログも毎週更新中です。ぜひご覧ください。



火災の増える時期を前に、高齢者世帯向けの消防署監修「住宅防火アドバイスボード」を寄贈
タウンニュース神奈川区版にも掲載



WFP ウォーク・ザ・ワールドに企業協賛
当日は有志がウォーキングに参加

As a member of the region, together with the region

As a corporate citizen working in the area, we assume that fostering better community is one of important missions.

We make effort various activities with neighbors. For example, to manage "the cooperate net work on disaster" that established for helping each other local residents and people who work in Oogchi, to help "Orange Project, a gentle town for elderly Rokkakubashi: regional measure for dementia," to distribute among senior citizen household through district council of social welfare "housing fire protection advice board," sponsorship to the WFP walk the world and so on.

Several bridges connecting society with us

Today we were able to hold 5th SCR briefing session "Arigatonight," it is likely to settle as an annual event. Visitors take pictures like alumni association and interact smily because they meet again unexpectedly. It is connected to our pleasure.

Thank to your cooperation, we have published our activity information magazine "JO" for 6 years and issued number 25 in this October. We sometimes give impressions and pointing out, and we will take efforts to transmit better information through "JO." We have updated our blog every week since last year. Please visit our page.

協働事業

タツミのえほん部プロジェクト

partner 株式会社タツミプランニング

4回目を迎えたタツミのえほん部プロジェクト。原作制作を担当する学生チームには、従来からの教育やデザインの専攻に加え、経済学部、社会学部、医学部の学生も参加。専門領域の垣根を越えて活発な議論を行いました。そんな多様なメンバーがタツミのえほん部としては初の「リズム系えほん」に挑戦。たくさんの個性的なキャラクターが登場する『どうぐ☆ショー』として完成しました。

鶴見大学短期大学部附属三松幼稚園で行った贈呈式では、えほん部メンバーによる読み聞かせも大いに盛り上がり、クライマックスの合唱シーンが終わると、会場の園児たちからは「アンコール！！」の声も。えほんの中に出てくる珍しい道具に触ることができる道具体験ワークショップも開催され、道具の音が鳴り響くと、園児たちからは大きな歓声が上がっていました。

タツミのえほん部プロジェクト

子どもたちの成長を応援するため、企業・学生・教育者が連携してオリジナル絵本を制作し、横浜市内の幼稚園・保育園・児童施設に届けるプロジェクト。2015年にスタートし、新作のオリジナル絵本を毎年発行している。

The 4th Tatsumi's Picture Book Project was held. Not only the student who major education and design, but also the students in faculty of Economy, sociology, and medics joined the producing team this time. They discussed actively regardless of their major field. The diverse members attempted to produce "rhythm type book" which was the first time in the history of Tatsumi's Picture Book. They completed their work "Dogu☆ Show" in which many unique characters show up.

The members read out the story at the presentation ceremony at Tsurumi University Junior College Department affiliated Sansho kindergarten and excited the audience. The kids even requested for encore after the last scene of singing. A workshop to let the kids experience the rare tools introduced in the book was also held. The kids shouted with joy as the tools made their sound.

Tatsumi's Picture Book Project

※ it is a project that enterprises, students, and educators corporate and produce original book which will be provided to kindergarten, kids daycare, and other child institution in Yokohama, in order to encourage children growing up.



三松幼稚園での読み聞かせ会の様子



消防団元気プロジェクト

partner 神奈川消防署／神奈川県立産業技術短期大学校／横浜デジタルアーツ専門学校

2017年に神奈川消防署から消防団員増強についてのご相談をいただいたことから始まった「消防団元気プロジェクト」。この度1年間にわたるプロジェクトが完結しました。

消防団の認知度を高めるためには、若者や主婦層など日頃消防団と関わりの少ない人たちに向けた情報発信が必要と考え、デザインを学ぶ学生によるデザインプロジェクトを提案。協進印刷の若手社員2名が指導役にあたり、何度もミーティングを重ねてプランを作成。今年2月には消防団の皆さんにプレゼンテーションを実施、その後も改良を重ね、夏から秋にかけて、消防署カウンター装飾用のロールスクリーン、横断幕、ノベルティ用の缶バッジ、ステッカーとしてカタチになりました。

学生たちの献身的な努力が認められ、10月には神奈川消防署長より感謝状が贈られました。ロールスクリーン、横断幕は神奈川区役所1階の消防署窓口に、ノベルティは区民まつりや出初式といったイベントで配布されます。



学生の貢献に対し、神奈川消防署長から感謝状贈呈



「絆」ロゴの缶バッジとステッカー
区役所のイベント等で配布される予定

"Firefighter Genki Project," that was launched after having received the voice from Kanagawa Fire Station about increasing the number of firefighter in 2017. We have been on this project for a whole year and finally completed.

In order to promote the Fire Brigade, we assumed that transmission of information to the those who have little connection with Fire Brigade such as the young and the housewives is necessary, thus we suggested the design project held by the students majoring in design. Kyoshin Print appointed two young employees as instructor, and had many meetings to produce and shape the plan. We gave a presentation to the firefighters in February, and we continued on revision of the plan. This summer and this autumn, it formed as a roll screen for decoration of fire station counter, a banner, can badges for novelty and stickers.

Because it was recognized that students' devotional efforts, we were awarded a letter of thanks from Kanagawa Fire Station in October. The roll screen and banner will be exhibited at the fire department window on the 1st floor of Kanagawa Ward Office and novelties will be distributed at the event such as the residents festival and the opening ceremony.



神奈川消防署のカウンターを飾る
ロールスクリーンと横断幕

今後の課題〈マネジメント・レビューより〉

各種の取り組みを経営への効果につなげていくための、効果測定・評価システムの精度向上

今年度より、すべての取り組みについてステークホルダーのベネフィットと自社経営への効果を測定し、評価する仕組みを運用していますが、十分に機能しているとはいえません。本業も含め、それぞれの取り組みが、誰のどんなニーズに応えたものであり、それが自社の経営にどのような効果と現れているのかを確実に測定・評価できるよう、マネジメントシステムの運用を見直していきたいと思っております。

PDCA が十分に機能しない原因のひとつとして内部監査が確実に行えていないことがあげられます。少人数であるがゆえに監査ができる能力を持った者が限られており、マネジメントシステムの責任者も兼ねていたりするので、どうしても監査がおざなりになりがちです。今後は外部の専門家に内部監査を委託するなどの工夫により、運用の精度を高め、全印工連 CSR スリースター認定にも挑戦したいと思っております。

会社の期待と社員の能力のマッチングと、教育効果の測定・評価

5年前より全員で年間300時間の学習機会を持つという目標を掲げています。ほぼ毎年目標は達成してはいますが、それらの教育と社員の成長が、会社の期待に沿ったものになっているか、教育の効果は十分発揮できているかが不鮮明です。

また、会社が目指す事業展開に社員の能力開発が追いついていないという問題もあります。会社の期待と能力のミスマッチはメンタル不調やモチベーションの低下につながりかねないので、個人の成長と能力を見極めながら育成計画を策定し、併せて教育の効果も測定できるように改善する必要があります。

知的財産を適正に扱うためのルール作り

ソフトサービスへのシフトを進めている当社としては、知的財産の価値を適正に評価していただき、その権利を尊重した取引を行っていただけるように、理解を求めていく必要があります。同時に他者の知的財産についても、故意であるなしにかかわらず、これを侵害することのないよう十分に注意する必要があります。

すべての知的財産の取り扱いについて、統一したルールを整備する必要があると考えています。

新入社員の採用と育成力の強化

毎年の定期採用が難しい状況の中で、いかに当社にふさわしい人材を発掘し、育成していくかということは大きな課題のひとつです。自社の魅力の伝え方、求職者の不安をどう解消していくのかなど採用力のレベルアップが求められます。

また縁あって採用した人材を戦力として育成する力も、まだまだ足りないと感じています。本年導入したセルフ・キャリアドックの活用などを始め、育成力の強化にも力を入れていきたいと思っております。



E3PA 環境保護印刷（クリオネマーク） 認定

2006年2月 認定
<http://www.e3pa.com/>



グリーンプリンティング工場 認定

2007年6月 認定 2016年6月 更新
<http://www.jfpi.or.jp/greenprinting/index.html>



PISM 印刷業情報セキュリティマネジメントシステム 認定

2013年3月 認定 2017年3月 更新
<http://www.kanagawapia.or.jp/pism.html>



YOKOHAMA
 地域貢献企業

横浜型地域貢献企業 認定

2009年3月 認定 2017年3月 更新
<http://www.idec.or.jp/keiei/csr/>



全印工連 CSR ツースター 認定

2015年6月 認定 2017年6月 更新
<http://www.aj-pia.or.jp/csr/main.html>



よこはまグッドバランス賞

2015～2016年度 認定 2017年度 ブロンズ認定
<http://www.city.yokohama.lg.jp/seisaku/danjo/hyoshou/>



2018CSR 報告書

発 行：株式会社協進印刷

発行日：2018年11月16日

〒221-0003 横浜市神奈川区大口仲町108

TEL.045-431-6611 FAX.050-3730-6273

<http://www.kyoshin-print.co.jp>

見返しの写真について

表：大口駅に入線する JR 横浜線

裏：大入橋より入江川を望む





<http://www.kyoshin-print.co.jp>